

# 有坂秀世博士の出生の地と

## その父鋁藏博士のこと

の出生番地は、公文書には記載されず、有坂家の人々には「三番町」の点までは記憶されていたが、それ以上の詳細——何丁目何番地かは、いつとはなしに忘れられたのではないかと思われる。

残された手段は、明治四十一年九月五日の時点における有坂鋁藏氏の現住所を求めることである。事前にはいろいろな可能性が考えられたのであるが、結果からいえば、現在よりどころとなるものは、ただ一つしかないようである。

明治四十年十一月二十五日発行の『學士會月報』第二百三十七號ノ二では、有坂鋁藏氏の住所は、

荏原郡入新井村新井宿一五二七(三頁)であり、同四十一年十一月二十五日発行の『學士會月報』第二百四十九號ノ二では、  
吳市莊山田三番町二ノ七三(五頁)

である。明治四十一年九月五日の時点でどちらに居住していたか、検討してみよう。

吳海軍工廠造兵部部員兼海軍砲術練習所教官であった有坂鋁藏氏は、明治三十九年七月三日付で海軍省出仕に補せられ、吳を離れた。外国駐在のためである。翌四十年

『上代音韻攷』(三省堂、昭和三十年七月)

所収の「有坂秀世博士略年譜」(以下、「略年譜」(『上代音韻攷』と簡稱))には、

明治四十一年九月五日 広島県吳市三番町に有坂鋁藏氏(東京帝國大学名誉教授工学博士)の五男として生まる。

とある(五二頁)。

明治二十二年七月一日、吳鎮守府が開庁されてより、吳は軍港として早くから歐風の町づくりを企図した。特にその中心地に対しては、何番町何丁目何番地という整然とした住居表示を採用した。年譜や伝記にとっては、「吳市三番町」だけでは不十分であり、これを明らかにすることが望まれる。

ところで、昭和十四年十一月九日付で、

大正大学より文部大臣にあてて、有坂秀世を大正大学教員に採用したき旨の申請書が出された。そのとき添えられた東京市世田谷区役所発行の有坂秀世氏の戸籍抄本には、「広島縣吳市番地不詳ニ於テ出生」と記されている。一方、有坂氏が著書『國語音韻史の研究』(明世堂、昭和十九年七月)によって学士院賞を授与されることになったとき、昭和二十七年一月二十五日付で日本学士院長山田三良あて提出した履歴書がある。それには「広島縣吳市三番町に於て東京府士族故有坂鋁藏の第五男として出生」と記されている。

これらのことを考えあわせると、有坂氏



学習院初等学科三年  
の秀世少年

一月十七日付で英国駐在を命ぜられ、八月七日に帰国して、八月九日付で海軍艦政本部出仕に補せられた。同年十二月二十八日付で造兵部長心得として古巣の呉海軍工廠にもどり、艦政本部出仕も兼ねた。明治四十年の『學士會月報』（第二百三十七號ノ二）に記された住所は、この直前までのものである。その後、造兵監督官として英国へ出張するため、明治四十四年一月十八日付で海軍艦政本部出仕に補せられて、呉を離れるまでの約三年間は、呉市莊山田三番町二ノ七三に居住したと考えてよからう。このことは、前記明治四十一年の『學士會月報』をはじめ、同四十二年十一月二十五日発行の『學士會月報』第二百六十一號ノ二（六頁）、同四十三年十一月二十五日発行の『學士會月報』第二百七十三號ノ二

(三頁)によって跡づけることができる。この約三年間中の一時期だけは、『學士會月報』以外の資料と照合することが可能である。目下のところでは、史料調査会の海軍文庫に残されている『水交社々員名簿』（明治四十三年六月三十日調）に「呉、三番、二、七三」（一九頁）とあるのみである。以上によって、明治四十年十二月の呉再赴任より明治四十四年一月まで、呉市内で転居することなく同一個所に居住していたとすれば、その住所は、呉市莊山田三番町二丁目七十三番地であり、それが五男秀世氏の出生の番地である。

それでは、莊山田三番町と三番町とはどう違うのか。明治三十五年十月一日、安芸郡の和庄町、二川町、宮原村、莊山田村の二町二村が合併して呉市となった。莊山田とは、従って、旧村名なのである。ところが、『大呉市民史論』には、明治三十七年八月、暫定的な町名改正をおこなったことが記されている(三七頁)。その記述からすれば、三番町は「大字莊山田村、小字三番町」と表示されたかみえる(三〇一―三三頁)。この点に関して、呉市入船山記念館にたびたび問いあわせたところ、『大呉市

民史』に対する解釈のみならず、呉市役所戸籍係に照会して戸籍便覧に掲載されていることを確認し、かつ、現在も「呉市大字莊山田村……」の本籍をもつ者が存すると教示を得た。とすれば、有坂氏出生当時の正式住居表示は、

呉市大字莊山田村小字三番町二丁目七十三番地

ということになる。「呉市大字〇〇村小字××町」の表示は、フランス、イギリスなどの外国生活も長く、江戸っ子でもあった鋳藏氏にはいささか抵抗感があり、それで簡略に表示したのかもしれない。秀世氏が大字、小字による表示を知っていて避けたのか、はじめから「三番町」としか教えられていなかったのか、今日ではいずれとも決めがたい。しかし、履歴書に「二丁目七十三番地」と詳記しなかったこととも考えあわせて、ただ「三番町」とのみ教えられていた可能性が大きい。

さて、大字莊山田村小字三番町二丁目七十三番地は、現在のどこに当るのであろうか。三番町は、現在、呉市中央三丁目、西中央三丁目となっているが、二丁目七十三番地がかつてどこにあったかは、容易に決

定できないようであり、入船山記念館の回答も、中央三丁目の一割であるとするのみである。しかし、将来、これを同定する可能性は、まだ失われてはいないと私は確信している。

最後に、「略年譜」(『上代音韻放』)の冒頭の一条、「有坂鋁藏氏(東京帝国大学名誉教授工学博士)」中の誤りを訂正しておく。

有坂鋁藏氏は、明治三十五年二月六日、満三十四歳のとき、海軍造兵大技士(海軍大尉相当の技術科士官)として呉海軍造兵廠製造科主幹の職にある一方、兼ねて東京帝国大学工科大学教授に任ぜられ、造兵学第二講座分担を命じられた。同年十一月二十五日、東京帝国大学より工学博士の学位を授与された。英国駐在のため、明治四十年二月十二日から同年九月十七日まで東京帝国大学教授の兼任を免ぜられていたが、九月十八日より再び兼任で造兵学第二講座分担を命じられ、それは、大正十二年三月三十一日、海軍造兵中将をもって予備役に編入され、海軍を退職する日までつづく。そして、同年四月五日付で専任の東京帝国大学教授となり、大正十四年八月二十一日、依願退官する。名譽教授の称号を授与

されたのは、大正十五年六月二十九日付であった。

従って、明治四十一年九月五日、五男秀世氏出生のとき、父鋁藏氏は海軍造兵中監(海軍中佐相当の技術科士官)として呉海軍工廠造兵部長心得の職にあり、東京帝国大学工科大学教授を兼ね、かつ工学博士であったというのが正しい。

筆を擱くにあたり、本稿を草する上でお世話になった多くの方々にお礼を申しあげる。(昭五・四・七)

〔注〕

(1) 拙稿「大正大学の有坂秀世講師」(『国語学』第一三三集、昭和五十八年六月)注1(九九頁)。「本書七八頁」

(2) この抄本にみえる本籍「東京府荏原郡駒沢村大字上馬引沢(昭和七年十月一日、東京市世田谷区三軒茶屋町八四番地番号と更正)」は、大正十二年十月十五日、東京府荏原郡玉川村大字瀬田一〇五六番地より転籍されたものである。瀬田に転籍される前の本籍は、東京市神田区三崎町啗丁目九番地であった。これは、四兄愛彦氏が明治四十五年一月十二日付で、学習院長乃木希典あて提出した学習院初等学科の入学願にみえるものである。秀世氏の出生届は、呉市役所で受付けられ、神田区役所に送付された。当時、出生届には出生の番地が記載されなかつ

たらしい。三兄磐雄氏、四兄愛彦氏とも呉市三津田(後述)で生まれた。磐雄氏の長男英雄氏によると、磐雄氏も「呉市番地不詳ニ於テ出生」であり、この記載を残念がっていたという。

(3) 同じものが同年二月十六日付でも提出されている。

(4) 一月二十五日付の履歴書の下書き(一月二十四日付)の写しが、後に母堂敏子氏より金田一京助氏に送られ、『国語学』第十輯(昭和二十七年九月)所載の「有坂秀世博士略年譜」(六七八頁)、さらには「略年譜」(『上代音韻放』)のもとになった。同誌九〇頁の【註】に、「ここに掲げた有坂秀世博士略年譜ならびに有坂秀世博士著作論文年表は、博士が今年学士院賞を受けられるについて、自筆で書かれた履歴書および著述年表を、金田一京助博士が写しておかれたものによった。」とあるのは、少なくとも正確ではない。詳細は、拙稿「有坂秀世博士の学士院賞受賞めぐって」(『國學院雑誌』第八十五巻第六号、昭和五十九年六月)にゆずる。

(5) 明治三十九年七月四日、『官報』第六九三三号。

(6) 明治四十年八月十日、『官報』第七三三三号。

(7) 明治四十年十二月二十九日、『官報』第七三三三号。

(8) 明治四十四年一月十九日、『官報』第八三三三号。

(9) 明治四十四年十一月二十五日発行の『學士會月報』第二百八十五號ノ二によれば、「在

外宅、本郷、曙、一三、はノ六」(三頁)となつている。四兄愛彦氏の前記「入學願」に「現住所、東京市本郷区駒込曙町十三番地はノ六号」とあるのがこれである。

(10) 「水交社」とは、海軍士官の親睦団体であり、現役のみならず、予備役、後備役、退役をも含む。

(11) 有坂鋸藏氏は、明治二十九年二月五日付で呉仮設兵器製造所(呉海軍造船廠の前身。これがさらに呉海軍工廠造船兵部となる。)製造主幹に補せられた(明治二十九年二月六日、『官報』第三三九号)。このとき、一家あけて呉に移り住んだかどうかは、資料不足でまだ明らかでない。ただし、明治三十一年の『水交社々員名簿』(三月十日開)に「神田、三崎、一、八」とある(六六頁)から、単身赴任だったかもしれない。明治三十二年以降三十八年まで(三十九年七月に前記荏原郡入新井村に移る。)は、海外出張も含めて、「吳軍港(正式に言えば、広島縣安藝郡、後に吳市)・莊山田村字三田(正しくは三津田)八五八番地次登番郎」に居住していたことが、『學士會月報』で知れる。また、明治三十二年、三十三年については、海軍文庫所蔵の『水交社々員名簿』で確認することができる。このことから推しても、有坂鋸藏氏は、短期間にたびたび転居しなかったのではないかと思われる。名簿の記載に従って、点を結ぶことしかできないのであるが、それではは大過ないのではなからうか。最初の赴任では主として

三津田に、再赴任では三番町に居住した、と私は推測している。

(12) 『大興市民史明治篇』二六一元頁。「大興市民史」刊行委員会、昭和五十二年十月。

(13) 明治三十五年二月七日、『官報』第壹七六号。

(14) 明治三十五年二月八日、『官報』第壹七七号。

(15) 明治三十五年十一月二十六日、『官報』第壹八二二号。

(16) 『東京帝國大學五十年史(下冊)』三三頁。東京帝國大學、昭和七年十一月。

(17) 同書三三頁。

(18) 同書三三頁。

(19) 同書六〇頁。

(20) 『軍事史研究』第六卷第一号(昭和十六年三月)所載の有馬成甫「海軍造船兵中將有坂鋸藏閣下の逝去を悼む」には、「十五年六月」と年月を記すのみである。日付は、厚生省援護局業務第二課に保存されている有坂鋸藏氏の奉職履歴の写しによる。有坂英雄氏蔵。

(21) 明治三十九年九月二十八日付で任海軍造船兵中監。明治三十九年九月二十九日、『官報』第壹九七号参照。